論　文

欧州とバルカン地域の関係についての一考察

－EUの東方拡大と欧州アイデンティティを中心に－

金　森　俊　樹*

はじめに
Ⅰ．EUと欧州におけるアイデンティティ
—欧州における東方の境界とは—
Ⅱ．西欧・中東欧地域とバルカン地域
—操作された欧州アイデンティティ—
Ⅲ．欧州における支配の形成過程の相違
—「領域的支配」と「民族的支配」—
Ⅳ．欧州へのバルカン地域の統合と平和
—可能性と若干の展望—

はじめに

1989年に始まった冷戦体制崩壊の波は，イデオロギー対立による分厚い「鉄のカーテン」によって東西に分断されていた欧州[1]を，統合の方向へと動かした。

その主たる動向は，主要な西欧諸国によって構成されていた当時の欧州共同体（EC），後には，ECを含んで1993年に正式に発足した欧州連合（EU）に，体制転換をした旧東欧諸国が加盟していく過程として現実化してきている。

所謂，EUの東方拡大の過程である。

このEUの東方拡大の過程では，社会主義の解体と体制転換が生じたポスト社会主義期の旧東欧諸国の中にも，歴史的な経緯や置かれていた環境が，比較的共通しているにもかかわらず，政治，経済のかたちに相違が存在している。この相違は，とくに，中東欧諸国と南東欧諸国[2]との間にみられる。また，EU加盟の順序への影響も大きい。

チェコ，ハンガリー，ポーランド，スロヴァキアといった中東欧地域の諸国は，EU加盟を視野に入れて，冷戦体制末期の1980年代後半から，ヴィシェグラード協力[3]のような下位地域統合[4]を構成してきた結果，2004年にEU加盟を果たしている。

一方，南東欧地域あるいはバルカン地域の諸国は，EU加盟に大きく遅れをとっている。事実，スロヴェニアを除くと中東欧諸国のEU加盟後に，2007年にブルガリアとルーマニア，2013年にクロアチアのEUへの加盟が実現したものの，それ以外のバルカン地域諸国は，いずれもEU加盟の加盟候補国あるいは潜在的加盟候補国にとどまっている[5]。

このEU加盟の潜在的加盟候補国である西バルカン地域では，1990年代に旧ユーゴスラヴィア連邦の解体時に起きた一連の内戦状態すらいまだ完全には収束していない状況である。

＊早稲田大学大学院社会科学研究科　博士後期課程２年

本稿では，主として欧州の側あるいはEUの側の視点から，この中東欧地域とバルカン地域の相違を検討し，相違が生じた理由について，両地域のそれぞれ異なる文明圏を背景とした支配の形成過程の相違にあるということを論じていきたい。

また，バルカン地域における平和をどのように構築していくかという観点から，欧州におけるアイデンティティ―本稿では，欧州アイデンティティとする―への移行を通して，EUという地域機構への加盟によるバルカン地域の平和構築の可能性についても検討したい。とくに，多民族・多宗教の共存を許容したオスマン帝国時代の支配形態に注目して，若干の展望を試みたい。

Ⅰ．EUと欧州におけるアイデンティティ
―欧州における東方の境界とは―

欧州の統合と拡大を進めてきたEUの目的は，原加盟国である西欧諸国にとっては，「欧州の統一」であり，旧東欧地域からの新規加盟国にとっては，「欧州への回帰」であった。そして，そのさらなる目標は，「欧州の確立」である。この実現に向けて，EUは，21世紀の最初の15年間を目処にして，欧州のキリスト教地域を中心に，ロシアを除く30カ国あまりの欧州諸国のほとんどを含むことを展望している。

また，拡大を通じて，国際的には，新しい多元的な世界秩序の構築に向けた動きもみられる。それは，多国間協調に基づく国際関係を基軸に，近隣諸国との関係の強化と安全確保，世界各地域および国連との連携を目指し，米国を意識しながら世界秩序への積極的関与を目指したものである［羽場 2005: 225-226］。

ECからEUへは，統合の過程の中で，その内部構造が変化し，ECを含むEUが生まれたが，旧ソヴィエト連邦ブロックの崩壊による旧東欧地域諸国の新規加盟等により，EUは欧州におけるアイデンティティの対象へと質的な変化を遂げてきているとみられる(6)。

ここで共有されている欧州的な価値というものは，主に，キリスト教，多元主義，連邦制，地域統合といったものである［羽場 2005: 229］。

このように，進捗中のEUの東方拡大を一瞥すると，欧州の定義は明瞭であるように思われる。しかし，冷戦後のEUの東方拡大の過程で最大の問題は，「欧州における東方の境界とはどこか」という問いである。この問いは，欧州におけるアイデンティティの形成過程に密接に結びついている。

欧州は，東西南北の方位の内，東方の境界だけは，地理的にも歴史的にも，その時々の情勢で変化してきた。EUも，欧州の東方の境界を明瞭に定義せずに東方拡大を行ってきている。

欧州とアジアの境界は，通説的理解ではウラル山脈であるともいわれるが，中世まで，欧州の東の境界は，ダーダネルス海峡から，せいぜいドン川辺りまでであった。アジアとの境界がウラル山脈まで東に移動したのは，近世以降，ロシア帝国が政治的に強大化した結果である［谷川 2003: 3-4］。

また，トルコのEU加盟問題というEUの最大の悩みにも欧州アイデンティティの問題が関わっている。

トルコは，冷戦終焉前の1987年のEC（当時）加盟申請後，2005年に加盟交渉が開始され，正式に加盟交渉を行っているものの，旧オスマン

帝国時代の版図であったブルガリアやルーマニアにまで，EU加盟の先を越されてしまった。EUがトルコの加盟をためらう大きな理由は，EU既加盟諸国への社会の融合に消極的な労働者を中心としたトルコ人移民の自由移動による失業問題が生じる懸念，トルコの経済水準と人口規模から生じる莫大な補助金の問題，多くの人口，EUの既加盟国でもあるキプロスが抱えるキプロス問題(7) 等であると指摘されている［庄司 2011: 38-42］。また，明示的にはされていないが，共和制になって以後，世俗主義を貫いてきたとはいえ，トルコがイスラーム国であるからという指摘もある［中津 2010b: 45］。

さらに，トルコ以外にも，ウクライナ，グルジア，そしてモルドヴァといった，バルト三国以外の旧ソ連邦構成諸国のEU加盟希望にもEUは消極的であり，欧州近隣諸国政策（European Neighborhood Policy=ENP）やそれを強化するイースタン・パートナーシップ（Eastern Partnership=EaP）といった枠組みで対応するにとどまっている。

こうしてEUは，地理的な基準として，欧州に位置する国家であることと，法的基準，経済的基準，政治的基準からなるコペンハーゲン基準(8) をEU加盟基準としながらも，同時に，EU拡大の「吸収能力」といった曖昧な言葉を用いて，EU加盟希望国との交渉を行っている。これは，拡大の「最終国境」を確定することが，EUにとって必ずしも有益ではないという判断から，加盟基準を曖昧にしておくことが最善の策と考えられているからである［庄司 2011: 39-46］。

こうした欧州アイデンティティをめぐる問題に，西欧・中東欧地域とバルカン地域との間にEUならびに欧州の統合への相違が生じた理由の一つを見出すことができる。

Ⅱ．西欧・中東欧地域とバルカン地域
―操作された欧州アイデンティティ―

EU加盟へのタイム・ラグやバルカン地域の混乱と紛争の原因は，ボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争やコソヴォ紛争といった1990年代以降における直近の政治的事件や体制転換による経済的結果(9) だけにとどまらない。そこには，民族や宗教をめぐる根深い対立の歴史が潜んでおり，様々な葛藤の記憶が複雑に絡み合って，地域住民の文化的帰属意識を規定しているからである。

その一つの側面が，同じキリスト教世界でも異なっている，カトリック・プロテスタント文明圏と東方正教文明圏との間における断絶である。換言すれば，欧州のキリスト教世界それ自体が，重大な二元性を孕んでいるということである。

現に，東方正教圏からEU加盟を果たしたのは，ギリシアとブルガリア，ルーマニアのみである。

中東欧地域諸国は，カトリック文化圏に属し，ドイツ，オーストリアとの歴史的・文化的・経済的なつながりが深く，冷戦終焉後，「中欧」を形成してきた［加藤 1990: 205-209］。

しかし，一方のバルカン地域諸国は，東方正教の文化圏に属し，いずれも市民社会が未発達であり，ビザンツ帝国，オスマン帝国の文化的影響が色濃く残っている。

こうしたキリスト教文明圏内部の文明の断絶が中東欧地域とバルカン地域の相違の背景に

あって，双方の地域の教会と国家権力の結びつきの強弱の相違につながり，冷戦時代に同じ東欧地域とされていた中東欧地域とバルカン半島地域の政治的過程の相違として現れたのである［小山 2004: 2-4］。

ここに，西欧のカトリック・プロテスタント圏と欧州の東半分との断絶をみてとることができる。ここで述べる欧州の東半分の地域とは，中世以来の西欧中心史観によって隠蔽されてきたビザンツ帝国と東方正教会の支配してきた地域を指す。

また，この両地域の断絶からは，西欧によるギリシアの別格扱いにみられる欧州アイデンティティにおける歴史観・文明観が操作されたという問題も指摘できる。

ギリシアが欧州アイデンティティの源とされているのは，古代ギリシアの文明によるものであり，近現代ギリシアのものではない。近現代ギリシアは，1830年の独立まで，オスマン帝国の支配下にあり，さらに，それ以前も，ビザンツ帝国の支配下にあった。

しかし，近代以降の欧州の自己認識は，古代ギリシアを自らの過去に取り込む一方で，古代ギリシアの後継者であるビザンツ帝国の存在を異質な文明圏であるとみなして，その歴史の枠組みから排除したものである。大体が，古代ギリシアは，キリスト教文明以前の異教の世界であり，小アジアから黒海沿岸までをも含む地域であった。その大きな特徴は，多神教と民主制にあった［井上 2003: 73-74］。

こうしたギリシアを欧州アイデンティティの源と別格扱いするのは，明らかに19世紀以降の操作された歴史観であり文明観である。なお，このことは，近現代ギリシアと同じ，東地中海世界に存在したビザンツ帝国と東方正教の文明圏にあったトルコを欧州の記憶から抹殺するものでもある［谷川 2003: 8-12］。

実際，欧州アイデンティティの具現化であるEU内でのギリシアの特異性は際立っている。ギリシアは，ルネサンス，宗教改革，17世紀の科学革命，啓蒙運動，フランス革命，産業革命等，西欧の歴史の進展に大きな影響をもたらした大変革から隔絶された。そして，ビザンツ帝国時代，オスマン帝国時代，独立時代を通じて，カトリック教会や欧州の列強の圧力を受け，ギリシア社会の基礎をなす価値観の形成や「反西欧」的な意識が大衆レベルで醸成された。その結果，欧州国家としてのギリシアのアイデンティティは判然としなかった［Clogg 1991=2004: 7-11］。この近現代ギリシアには，バルカン地域の他の諸国と共通の社会的問題が存在する。それ故，バルカン半島に位置する諸国の中で，ギリシアだけが，急激に他のEU既加盟諸国のような西欧型社会に転換するということ自体が困難なのである［田中 2012: 29-33］。

このギリシアを欧州アイデンティティの源とする歴史観や文明観の操作が行われた歴史をひもとくと，395年にドナウ川の支流であるサヴァ川を境界にして東西ローマ帝国が分裂したことに遡ることができる。

旧西ローマ帝国領の地域では，この後，格差が比較的小さな複数の国家が大国として競うという近代欧州が徐々に出現し，主権国家が次第に形成されてくる。この過程で，外交空間と内政空間が峻別され，主権国家ならびに主権国家間の関係としての国際関係が発展していった。

他方，旧東ローマ領の地域であったビザンツ帝国の支配地域では，1453年のビザンツ帝国滅

亡後も，オスマン帝国による東方からの拡大と支配が続いた。15世紀以降，バルカン地域は次々とオスマン帝国の支配下に入っていき，旧西ローマ領の地域の文明圏とは断絶が続いた。そして，オスマン帝国の支配の下で東方正教の文明圏は維持されていった。そのため，旧東ローマ領の地域は，単一の大帝国の支配下に置かれた時代が長かったのであり，その地域に主権国家や主権国家を前提とした国際関係が発達することは無かったのである。

ここに，近現代の国際関係の原型を創り出した旧西ローマ領の地域と国際関係が未熟なまま20世紀を迎える旧東ローマ領の地域との間に明確な相違が生じてきた。

このような経緯から，地理的には欧州に位置しながら長らくアジア発祥の帝国の支配下にあったバルカン地域は，西欧・中東欧地域と異なる文明圏に属していたのである。

この文明圏の相違によって生じた異なった歴史的経緯は，欧州とその境界の東方の地域における相違をもたらした大きな理由である。また，この歴史的経緯が，欧州における支配形成の相違にも大きく影響してきたといえよう。

Ⅲ．欧州における支配の形成過程の相違
―「領域的支配」と「民族的支配」―

西欧・中東欧地域のカトリック・プロテスタント文明圏諸国では，近現代において，主権国家と主権国家をアクターとした国際関係を築いてきた結果，領域と国境で国家を区切るという「領域的支配」が進んできた。

これに対して，バルカン地域では，国家を領域と国境によって領域的に確定することが非常に困難であった。何故なら，ビザンツ帝国及びつづくオスマン帝国による支配の下から近現代に独立したバルカン地域諸国の境界概念では，領域ではなく，民族・エスニシティによる境界概念が定着していたからである。

それ故，オスマン帝国の衰亡で独立していったバルカン諸国は，各々の国が，歴史上，最も大きな版図を有していた時代の地理的境界を自国の領土の国境にしようとしたのである。換言すれば，「民族的支配」が，バルカン地域の境界を形作ってきたといえよう。バルカン地域の各国が，自民族・国家の歴史上の黄金期を振り返って，過去最大の領域を自国の境界であるとすれば，必然的に，領土や国境は，重複することになる(10)。

その結果，バルカン地域では，民族・エスニシティの過去の歴史に基づく国境や領土をめぐる混乱や対立が生じ，時には，地域紛争の大きな原因にすらなってきたのである。

こうした欧州における領域へのアイデンティティ形成過程の相違は，西欧・中東欧の，領域を重視する領域的支配の形成過程と南東欧・バルカン地域の民族・エスニシティを重視する民族的支配の形成過程の相違から生じてきた。この領域重視の支配と民族・エスニシティ重視の国家形成の相違は，従来から欧州を東西に分けて論じたコーンの指摘［Kohn 1944］以来，スミス［Smith 1986］らが継受してきた東西欧州地域諸国の二分法(11) とも合致する。この結果，バルカン地域は，西欧の領域主義の波及時に，国境の線引き等で，「欧州の火薬庫」といわれるような紛争多発地帯になっていくことになる［月村 2006: 4］。

EUの東方拡大とは，EU域内での非領域的

な新しい支配の拡大であり，主権国家が国内の支配を維持しつつ，その一部の機能や分野を多数の地域機構に付託するという重層的な支配形態の拡大である。

冷戦直後の欧州の国際関係の再構築過程では，中東欧地域もバルカン地域も含めた旧東欧地域全体が，下位地域統合の形成をステップにして，欧州―ここではEU―への参加につながるという議論が存在した。現実に，中東欧地域諸国は，この過程を踏んで，EU加盟を果たしてきた(12)。

しかし，バルカン地域にあっては，この動きについて，EU加盟を希望しているバルカン地域諸国の多くが自国の国家主権の確保が不十分であること等の理由からバルカン地域が下位地域統合を形成してEUへ統合するという過程に進む可能性には否定的な見方がある［月村 2006: 12］。また，こうしたことから，バルカン地域の安定化，発展やEU加盟に対して否定的な見解も存在する［山本 2005: 18-19］。

また，実質的に欧州の統合であるEUに加盟できた中東欧地域の諸国といまだに加盟を実現できていない上，地域紛争も収束していないバルカン地域の諸国との差異は，易々とは変わらない異なる文明圏の相克であるという指摘も否定はできない。その結果，EUが加盟希望諸国の全てを抱え込む負担を考慮して，統合の行き過ぎは繁栄した統合クラブとしてのEUの終わりとなるという悲観的な議論も出てきている。

つまり，EUは，新規にEU加盟希望諸国を加盟させて拡大するよりも，むしろ，魅力的な連合的な地位を，トルコを含めバルカン地域諸国に与えることにとどめて，EU既加盟諸国の統合の深化に向けた内部的な改革に努力するべきであるといった議論である［Welfens 2001: 94］。

Ⅳ．欧州へのバルカン地域の統合と平和
―可能性と若干の展望―

それでは，欧州への統合，現実的には，EUの東方拡大による欧州へのバルカン地域の統合とそれによる平和には，否定的な展望しかみられないのであろうか。

筆者は，必ずしもそうは考えない。

確かに，西欧のイニシアティヴが主体となって進んでいるEUの統合の深化と東方への拡大にみられる欧州の統合による平和の実現には，様々な根深い未解決の問題が存在している。東方拡大に含まれる国家の範囲も明瞭ではない。

しかし，欧州において，世界史上，特筆される危機を乗り越えてきた歴史，統合過程が膠着化して死に体となった時期を何度も乗り切ってきた実績，そして共通通貨ユーロの実現，通称，「EU大統領」といわれている欧州理事会常任議長の制度の確立といった前例のない壮大な実験が進行中であること等といった事由により，先行きを楽観視する議論も存在しているからである［中津 2010a: ⅰ］。

また，EUは，1990年代のバルカン地域の混乱と紛争に対して無策であった反省から，1999年に安定化・連合プロセス（Structural Adjustment Program=SAP）を設けた。そして，2000年６月のフェイラ欧州理事会で，西バルカン諸国を潜在的加盟候補国としており，加えて，2003年３月のブリュッセル欧州理事会で，西バルカンの将来は，EUの中にあると，すでに「公約」してもいる。

EUがこの地域にこだわるのは，この地域が混乱と貧困のままで放置されれば，EU自身を脅かすという懸念を持っており，この地域を豊かにし，安定化させることが，翻ってEUの政治的利益にもなるからであり，さらには，バルカン地域が不安定な地域のまま紛争が起こり拡大すれば，世界全体にも影響しかねないからであろう［小山 2010: 3］。

従って，東西の地理的・歴史的経緯が異なることによって生じた文明圏の相違から，支配形態の相違が二分された欧州全域の統合とて，EUの潜在的な拡大と統合という欧州における世界史上初の壮大な実験が成功する可能性を否定することはできないのである。

バルカン地域の混乱と紛争の収束や統合による平和，安定の可能性は，このEUへの統合に委ねられているといっても過言ではないであろう。そして，統合と拡大のただ中にあるEU主体の欧州の形成が，バルカン地域における統合の具体的な過程をみてゆく上で，最も注目すべき点の一つであるといえる(13)。

アイデンティティとは，確実で永続性を持つ，あるいは持つと考えられるものと自己を同一視することによって，歴史における自己の存在証明を求めようとする精神作用を指す。それ故，自らの生命を超えて恒久的に持続する価値があるとみることができる自らが帰属する民族・エスニシティや宗教そして国家等は，その対象になり得る［馬場 1980: 201］。

そこで，筆者は，国際政治におけるアイデンティティの重要性に対する指摘にのっとり，また，冷戦後のバルカン地域等で生じた「新しい戦争」が，アイデンティティをめぐる紛争であるという指摘［Kaldor 2001=2003］に着目したい。そして，冷戦後にバルカン地域で生じた地域紛争の原因は，異なった歴史的経緯により生じてきたアイデンティティ間の対立が重要であると考えている。さらに，バルカン地域の欧州への統合の可能性として，多民族・多宗教の共存を容認したオスマン帝国の「柔らかな専制」(14) 体制［鈴木 1993; 1992］に，バルカン地域の欧州への統合の鍵があるのではないかと筆者は考える［金森 2012］。

オスマン帝国の支配体制は覇権的統治の一形態ではあったが，オスマン帝国時代，旧ビザンツ帝国の版図を受け継ぎさらに拡大したバルカン地域を含むオスマン帝国内部においては，500年にわたって紛争が起きなかったということも史実である［林 2008］。

EUは，国家ではなく，複数の国家が共通の機関を設立して国家主権の一部をプールし，共同行使する統治の枠組みであり［庄司 2011: ⅰ］，他に類例をみない地域機構である。

ここで注目すべき点は，近代のウェストファリア体制形成以降，国際関係を構築する上で至上の権利とされてきている国家の主権が，一部であるとはいえ，国家からその上位の地域機構であるEUに付託されているということである。

民族的支配を形成する道を辿ったバルカン地域諸国に，国際関係の構築上，西欧・中東欧地域の領域的支配の形成が波及した結果，バルカン地域に位置する各国ごとの歴史上の黄金時代における最大の領域と境界を主張することにつながったことは，先述した通りである。その結果が，各国の主張する領土および国境の重複につながり，バルカン地域を不安定で潜在的な紛争多発地域としてきたのである。

何れにせよ，民族自決権を至上の権利とする領域的支配の概念を，民族的な支配の概念に慣れ親しんできたバルカン地域に機械的に適用すれば，不安定性を完全にぬぐい去ることは不可能であろう。民族・エスニシティや宗教へ帰属するアイデンティティの重要性については，エトニ概念を提唱して，ナショナリズムの強さの再認識を説いたスミスの指摘［Smith 1991］や宗教とナショナリズムの関係から国際関係における宗教の重要性を説いたユルゲンスマイヤーの指摘［Juergensmeyer 1993］の通りである。

しかし，欧州における帰属先のアイデンティティ複合の可能性についても，また，議論の俎上に昇っている［梶田 1993: 40-49］。欧州アイデンティティと民族的なアイデンティティは，しばしば対立するが，必ずしも相互に排他的ではないのである。

従って，国際関係の至上の権利であり，独立した主権国家の独占物であった主権を，たとえ一部であっても，その上位の地域機構へと付託することは，バルカン地域の混乱や紛争といった問題を解決する上で，一つの選択肢になり得るのではないであろうか。すなわち，国家主権から地域主権への移行といった議論である［小山 2004: 45-46］。その背景には，唯一，主権を持ちうる対象とされてきた主権国家概念の変質がある。すなわち，近代以降の国家主権の思考から国際立憲主義の思考への大きな変容である［篠田 2012: 335-340］。

さらに，EUによる欧州の統合と平和の実現に向けた史上初の壮大な実験を成功させる上では，500年間の平和を築いたオスマン帝国の多民族・多宗教の共存を許容した支配形態から学ぶべき点も多いのではないかと筆者は考える。

具体的には，国際関係を規定する至上の権利である主権を国家から地域機構―欧州では，事実上，EU―へと付託・共有し，国家主権から地域主権へと移行させ，多民族・多宗教を許容することができれば，バルカン地域の潜在的な政治的，経済的，社会的な不安定性を安定化させることがより容易になるのではないかということである。また，EUの東方拡大との関係でも，欧州において欧州アイデンティティの議論が行われている点も看過できない点である。

そして，民族自決の原則を超えたアイデンティティの変容［吉川 2009; 2003］の実現によって，西欧を中心に発達した領域的支配の概念の産物である民族自決権を万能薬として機械的に適用する思考を乗り越えたところに，欧州の国際関係の新たな展望がひらけてくるのではないだろうか。

少なくともEUとバルカン地域の関係に限っては，国家主権から地域主権への移行と多民族・多宗教を許容する地域統合への変容に，欧州へのバルカン地域の統合と平和に向けた一つの可能性があると筆者は思料する。

〔投稿受理日2012.8.24／掲載決定日2013.1.24〕

注

(1) 欧州という地域を明確に定義することは，「もしもヨーロッパに固定した境界を与える者がいるとすれば，それは，時間を考慮にいれない劣悪な地理学だけであろう。」［Pomian 1990=2002: 9］と言わざるを得ないであろう。しかし，本稿での議論を進めていく上では，欧州の定義は不可欠なので，欧州とは，ユーラシア大陸に位置する旧西欧地域および旧東欧地域の諸国とともに，旧ソヴィエト連邦を構成していたバルト三国までを含めた地域であると定義して，議論を進めていくこととする。

(2) 東欧地域とは，第二次世界大戦後に，社会主義体制となった欧州地域諸国として本稿では議論を

進めていくこととする。旧ソヴィエト連邦ブロック諸国，冷戦後に分裂した旧ユーゴスラヴィア連邦構成諸国，そしてアルバニアである。中東欧地域とは，冷戦体制の崩壊後にEUに加盟したチェコ，ハンガリー，ポーランド，スロヴァキアを指す。そして，南東欧地域あるいはバルカン地域とは，東欧地域から中東欧地域諸国を除いた地域である。この地域には，西バルカン地域が含まれることとする。

(3) ヴィシェグラード協力とは，1991年２月にハンガリーのヴィシェグラードで開催された首脳会議で発足した下位地域協力である。ハンガリー，ポーランド，チェコ・スロヴァキア（1993年にチェコとスロヴァキアに分裂）によって構成された。ヴィシェグラード協力は，EUおよび北大西洋条約機構（NATO）に対して，地域全体で加盟申請をする目的で構成された。EU加盟後も外交協力や地域協力について定期的な会合を継続している［佐藤監修・高橋・臼井・浪岡 2006: 262-263; 羽場 2011: 116-117］。

(4) 下位地域協力（サブ・リージョン）とは，1980年代後半の冷戦体制の末期から，とくに欧州で顕著になってきた現象で，地域（リージョン）の下位体系を指す。ここでの地域とは，欧州全域である。欧州統合への胎動の中で，統合に向けて，その「待合室」として，EC（当時）の未加盟諸国が，隣接諸国同士，地中海沿岸，アルプス・アドリア，中・東欧，バルト海沿岸等の欧州内部の各地域で，東西欧州の境界を越えて下位地域統合を形成するという状況もみられた［百瀬 1996: 3-4］。バルカン半島地域における下位地域協力の初期の具体的な形成過程については，［今井（菅原）1999; 今井 1996］に詳しい。また，国境を挟んで位置する市町村の間で協力関係を築こうとするミクロレベルの地域協力がユーロリージョン（Euroregion）と呼ばれはじめた1960年代以降からのユーロリージョンと越境地域協力（Cross Border Cooperation=CBC）の展開については，［高橋 2012］が詳しい。高橋は，地域協力の活動をCBC，その活動を行っているアクターをユーロリージョンとして両者を分けて論じた上で，地域の主体的な意思と活動が不可欠であり，ウェストファリア体制から脱却した新しい国際関係のありかたを考えなければならないと述べている［高橋 2012: 171-172］。

(5)「加盟候補国」および「潜在的加盟候補国」の用語の定義と分類は［河津 2012: 2］による。

(6) ECからEUへの統合過程で，地域機構の内部構造に変化がみられる一方，ECが「平和のプロジェクト」としての欧州の統合として生まれた点など，ECとEUの間には，一貫性もみられる点は看過できない。

(7) キプロス問題とは，EU既加盟国であるキプロス共和国が南北に分断されているという問題である。キプロスは，1960年８月に英国より独立したが，ギリシア系住民とトルコ系住民の間の対立から内戦が勃発した。その結果，1964年に国連キプロス平和維持軍（United Nations Peacekeeping Force In CYPRUS=UNFICYP）が駐留を開始したが，かえってギリシアとトルコの軍事介入を招き，事実上，南北に分断された状態が続いている。駐留トルコ軍の実効支配地域は，1975年にキプロス・トルコ連邦国を宣言，1983年に北キプロス・トルコ共和国として独立宣言を行ったが，承認国は，トルコ一国のみである。このキプロス問題がトルコのEU加盟の最大の障害であるという指摘もされている［中津 2010b: 45-47］。

(8) コペンハーゲン基準とは，1993年にEUのコペンハーゲン理事会で，中東欧，南東欧諸国がEUに加盟するために設けられた条件である。民主主義，法の支配，人権，少数者の尊重と保護，といった法律面，市場経済が機能し，EU域内の競争に耐えうるという経済面，政治，経済，通貨同盟等のEU構成国としての義務が履行できるという政治面からなる［佐藤監修・高橋・臼井・浪岡 2006: 139］。

(9) 体制転換の際，同じバルカン地域であってもブルガリアやルーマニアといった旧ソヴィエト連邦ブロックを構成していたバルカン地域諸国と比較すると旧ユーゴスラヴィア連邦構成国家（スロヴェニア，クロアチア，セルビア，モンテネグロ，ボスニア・ヘルツェゴヴィナ，マケドニア，コソヴォ）ならびにアルバニアは，体制転換前の経済体制からして大きく異なっていた。このことは，両者の体制転換後に，他の旧東欧諸国と異なる道程へと導いた。第二次世界大戦後から1974年憲法体制への転換の時期を経つつも，旧ユーゴスラヴィア連邦は，分裂するその末期まで，ティトーによって導かれ，カルデリを中心に築かれた各連邦単位に対して分権的な労働者自主管理主義経済

体制［Kardelj 1976=1978; 1975; 1975=1978］の下にあった。また，アルバニアは，フルシチョフによるスターリン批判後の旧ソヴィエト連邦を修正主義として決別し，旧コメコン（経済相互援助会議）を脱退。文化大革命の間の中国とは蜜月関係にあったが，東欧革命の波及まで，世界で唯一のスターリン主義国家として，アウタルキー経済を選択した。両者の経済体制について，旧ユーゴスラヴィア連邦の労働者自主管理体制については［小山 1996］を，また，アルバニアのアウタルキー経済体制については［中津 2004; 1991］を参照されたい。

(10) 例えば，コソヴォ独立か否かをめぐって争われてきたコソヴォ紛争におけるセルビア人とアルバニア人の対立についてみると，つぎのような境界の重複がみられる。セルビア人側は，中世セルビア王国時代，コソヴォがその揺籃の地であった時代を強調し，コソヴォの独立を認めない。他方，アルバニア人側は，セルビア人を含むスラヴ系民族がバルカン半島に南下してくる以前のバルカン半島の住民であった古代のイリリア人の後裔として，また，近代以降の民族自決権の思考から，アルバニア人が人口で多数を占めるコソヴォの独立を主張している。このような構図では，両者の主張する領域や国境は必然的に重複してしまうのだが，民族的支配の歴史が長かったバルカン半島地域に領域的支配の概念が機械的に適用されることで，各国間に，このような対立が生じてきている。

(11) 厳密にいえば，コーンとスミスの二分法は異なる。コーンは西欧と中東欧を区別しているのに対して，スミスにおいては，コーンを措定しつつも，欧州内の二分法ではなく，近代国民国家のモデルたる西欧におけるネイション形成とそれ以外のパターンとの区別である［月村 2011］。

(12) 冷戦終焉直後のバルカン地域における（下位）地域統合の詳細については，［今井（菅原）1999; 今井 1996］を参照されたい。

(13) バルカン地域の平和と安定は，欧州地域のみならず，ロシア，中央アジアやコーカサスから西欧に至る経済的重要性を持つ。なぜならば，ロシア，中央アジアやコーカサス地域から西欧へと安定的に石油や天然ガス等のエネルギーを輸入するうえで，パイプラインの敷設といった陸路でも海運のように海路でもバルカン地域が不可欠な経由地になるからである。従って，西欧のエネルギー安全保障上，バルカン地域の平和と安定は不可欠である。また，同時に，バルカン諸国自体にとっても，エネルギー安全保障は重要であり，自国領土をパイプラインが経由することによる経済的利益や経済的発展の潜在的な可能性は高い。パイプラインの敷設をめぐる欧州の採っている具体的な戦略については，［中津 2010c］を参照されたい。

(14) ここで，鈴木が述べている「柔らかい専制」とは，タンズィマート制，ミッレト制といったオスマン帝国の支配構造である。タンズィマート制とは，1839年から1876年におけるオスマン帝国の一連の恩恵的改革を意味する。オスマン帝国のスルタンであったアブデュルメジトが，1839年11月に外相のムスタファ・レシト・パシャに起草させた「ギュルハネ勅令」によって実現した。内容は，イスラム教徒・非イスラム教徒を問わず，オスマン帝国内全臣民の法の前における平等，全臣民の生命・名誉・財産の保証，裁判の公開，徴税請負制（イリティザーム）の廃止，徴兵制の改善等である。また，ミッレトとは，「宗教共同体」を意味するオスマン語であり，オスマン帝国の諸々の宗教共同体に対する寛容な立場をとった制度であった。オスマン帝国では，教会建物の増改築や公的空間での宗教行事に対する規制があったとはいえ，教会組織内部の人事に直接干渉することはまれで，典礼や教会財産に関する自治を保障していた。ただし，ミッレトの語が指している対象には，19世紀のタンズィマート制の時期には，「国民」に相当する意味をも派生していたとされる。実際，ギュルハネ勅令においても，ミッレトには，「非ムスリム共同体」と「国民」の意味が混在していた。特に，バルカン地域では，ミッレトの意味合いは，キリスト教徒諸民族のオスマン帝国からの独立に向けて，「ネーション」の意味へと比重を移していった。タンズィマート制ならびにミッレト制についての詳細は，それぞれ，［永田 2002］ならびに［黒木 2002］を参照されたい。

参考文献

馬場伸也［1980］『アイデンティティの国際政治学』東京大学出版会
羽場久美子［2011］「EU·NATOの拡大と中・東欧の『民主化』」羽場久美子・溝端佐登史編著［2011］『ロシア・拡大EU』ミネルヴァ書房: 99-127頁
羽場久美子［2006］「ヨーロッパの拡大―グローバリズムとナショナリズムの相克―」羽場久美子・小森田秋夫・田中素香編［2006］『ヨーロッパの東方拡大』岩波書店: 1-28頁
羽場久美子［2005］「拡大EUと中・東欧，ワイダー・ヨーロッパ－多元的な世界秩序の構築に向けて」森井裕一編［2005］『国際関係の中の拡大EU』信山社: 225-249頁
林佳世子［2008］『オスマン帝国500年の平和』講談社
今井（菅原）淳子［1999］「冷戦後のバルカンにおける地域協力」山極晃編［1999］『冷戦後の国際政治と地域協力』中央経済社: 91-118頁
今井淳子［1996］「バルカン『安定と発展のゾーン』へ―地域協力の歴史と現状」百瀬宏編［1996］『下位地域協力と転換期国際関係』有信堂: 130-155頁
井上浩一［2003］「ビザンツ帝国と『ヨーロッパ・アイデンティティ』」谷川稔編［2003］『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社: 72-87頁
井上浩一［1990］『生き残った帝国ビザンティン』講談社
梶田孝道［1993］『統合と分裂のヨーロッパ ―EC・国家・民族―』岩波書店
金森俊樹［2012］「バルカン半島地域の宗教と地域紛争―宗教をめぐる紛争とアイデンティティを中心に―」『社学研論集』20: 110-122頁
金森俊樹［2010］「コソヴォ独立とアルバニア人のナショナリズムの質的変容―民族・エスニシティ問題を中心に―」『ロシア・ユーラシア経済―研究と資料―』937: 39-50頁
加藤雅彦［1990］『中欧の復活「ベルリンの壁」のあとに』日本放送出版協会
河津邦彦［2012］「EU拡大の見通し」『マケドニア旧ユーゴスラビア共和国』外務省欧州局中・東欧課: 2頁
吉川元［2009］『民族自決の果てに－マイノリティをめぐる国際安全保障』有信堂
吉川元［2003］「国境を越える国際関係論」吉川元編［2003］『国際関係論を超えて トランスナショナル関係論の新次元』山川出版社: 3-26頁
小山洋司［2010］『南東欧バルカン経済図説』東洋書店
小山洋司［2007］「EU南東方拡大と西バルカンの課題」『日本EU学会年報』27: 98-122頁
小山洋司［2004］『EUの東方拡大政策と南東欧―市場経済化と小国の生き残り戦略―』ミネルヴァ書房
小山洋司［1996］『ユーゴ自主管理社会主義の研究―1974年憲法体制の動態』多賀出版
黒木英充［2002］「ミッレト」日本イスラム協会・嶋田・板垣・佐藤監修［2002］『新イスラム事典』平凡社: 470-471頁
百瀬宏［1996］「下位地域協力と現代世界」百瀬宏編［1996］『下位地域協力と転換期国際関係』有信堂: 3-17頁
永田雄三［2002］「タンジマート」日本イスラム協会・嶋田・板垣・佐藤監修［2002］『新イスラム事典』平凡社: 334-335頁
中津孝司［2010a］「はじめに」中津孝司編［2010］『欧州新時代 ―6億人のEUとビジネス―』晃洋書房: ⅰ-ⅱ頁
中津孝司［2010b］「トルコはEUに加盟できるのか」中津孝司編［2010］『欧州新時代 ―6億人のEUとビジネス―』晃洋書房: 42-54頁
中津孝司［2010c］「新たなエネルギー回廊構築が大欧州世界を強化する」中津孝司編［2010］『欧州新時代 ―6億人のEUとビジネス―』晃洋書房: 71-90頁
中津孝司［2004］『アルバニアの混乱と再生［第二版］』創成社
中津孝司［1991］『アルバニア現代史』晃洋書房
大倉晴男・金森俊樹・中津孝司［1999］『新版・現代バルカン半島の変動と再建』杉山書店
佐藤幸男監修・高橋和・臼井陽一郎・浪岡新太郎［2006］『拡大EU辞典』小学館
仙石学［2012］「中東欧」森井裕一編［2012］『ヨーロッパの政治経済・入門』有斐閣: 133-152頁
篠田英朗［2012］『「国家主権」という思想　国際立憲主義への軌跡』勁草書房
庄司克宏［2011］『欧州連合 統治の論理とゆくえ』岩波書店
尚樹啓太郎［1999］『ビザンツ帝国史』東海大学出版会
鈴木董［1993］『イスラムの家からバベルの塔へ　オスマン帝国における諸民族の統合と共存』リブロポート
鈴木董［1992］『オスマン帝国 イスラム世界の「柔

らかい専制」』講談社
髙橋和［2012］「欧州における下位地域協力の展開―近代国家体系への挑戦」百瀬宏編著［2012］『変貌する権力政治と抵抗 国際関係学における地域』彩流社：151-172頁
田中素香［2012］「債務危機と財政規律の政治経済学 ギリシャとイタリアのケース」『国際問題』611: 28-36頁
谷川稔［2003］「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ 記憶の歴史学から」谷川稔編［2003］『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社：3-28頁
月村太郎［2011］「バルカン地域における非バルカン化―旧ユーゴ後継諸国の現状と展望を中心に」『同志社政策研究』5: 89-106頁
月村太郎［2006］『バルカン地域におけるバルカン化と非バルカン化』神戸大学大学院法学研究科CDAMS「市場化社会の法動態学」研究センター
上垣彰［2011］「東欧における経済的後進性について―ルーマニアおよびブルガリアを例として―」仙石学・林忠行編著［2011］『ポスト社会主義期の政治と経済―旧ソ連・中東欧の比較』北海道大学出版会：235-261頁
山田満［2003］『「平和構築」とは何か 紛争地域の再生のために』平凡社
山本武彦［2005］「リージョナリズムの諸相と国際理論」山本武彦編［2005］『地域主義の国際比較―アジア太平洋・ヨーロッパ・西半球を中心にして―』早稲田大学出版部：1-28頁
Ahrweiler,H.［1975］*L'idéologie politique de l'empire byzantine.* Presses Universitaires de France, Paris, France.
Blockmans, S.［2007］*Tough Love The European Union's relations with the Western Balkans.* T·M·C·Asser Press, Hague, Netherlands.
Clogg, R.［1991］*A Concise History of Greece.* Cambridge University Press, Cambridge, U.K.（＝高橋暁訳［2004］『ケンブリッジ版世界各国史 ギリシャの歴史』創土社）
Cviić, C. and Sanfey, P.［2010］*In Search of The Balkan recovery The Political and Economic Reemergence of South-Eastern Europe.* HURST & COMPANY, London, U.K.
Jeffries, I.［1996］*Problems of Economic and Political Transmation in the Balkans.* PINTER, London, U.K.
Juergensmeyer, K. M.［1993］*The New Cold War ? Religious Nationalism Conflicts the Secular State.* University of California Press, Berkeley, U.S.A.
Kaldor, M.［2001］*New and Old Wars Organized Violence in a Global Era.* Polity Press, Oxford, U.K.（＝山本武彦・渡部正樹訳［2003］『新戦争論 グローバル時代の組織的暴力』岩波書店）
Kardelj, E.［1976］*Protivrečnosti društvene svojine u savremenoj socijalističkoj praksi.* ,Drugo dopunjeno izdanje, Randnička štampa, Beograd, Yugoslavia（＝山崎洋・山崎那美子訳［1978］『自主管理社会主義と非同盟 ユーゴスラヴィアの挑戦』大月書店）
Kardelj, E.［1975］*Istorijski koreni nesvrstavanja.* Izdavački centar, Komunist,Beograd, Yugoslavia（＝山崎洋・山崎那美子訳［1978］『自主管理社会主義と非同盟 ユーゴスラヴィアの挑戦』大月書店）
Kardelj,E.［1975］*The Nation and International Relations.* Socialist Thought and Practice. Beograd, Yugoslavia
Kohn, H.［1944］*The Idea of Nationalism.* The Macmillan Company, New York, U.S.A.
Pomian, K.［1990］ *L'Europe et ses nations.* Ēditions Gallimard, Paris, France（＝松村剛訳［2002］『［増補］ヨーロッパとは何か 分裂と統合の1500年』平凡社）
Smith, D. A.［2003］ *Chosen Peoples Sacred Sources of National Identity.* Oxford University Press, Oxford, U.K.
Smith, D. A.［1991］*National Identity.* Penguin Books., Ltd., London, U.K.
Smith, D.A.［1986］*The Ethnic Origins of Nations.* ,Basil Blackwell, Oxford, U.K.
Vickers, M. and Pettifer, J.［1997］*Albania From Anarchy to a Balkan Identity.* Hurst & Company, London, U.K.
Welfens, J. J. P.［2001］*EU Reforms and International Organizations.* Springer-Verlag, Berlin Heidelberg, Germany.

※なお，以上の参考文献の表記方法については，査読者のご指示に従った。

【追記】

本稿は，2012年に筆者が行ったアルバニア共和国，コソヴォ共和国を中心とするバルカン地域の現地調査の結果を踏まえている。

本稿の作成に当たっては，ベイトラフ・デスターニ博士，エディ・シュクリウ教授，ネジャメディン・スパヒュ教授，アヴニ・マズッレク教授に多くの有益な示唆や御教示を頂戴した。

この場において，本稿の作成に当たり多大な御指導，御教示を賜った先生方に御礼申し上げる次第である。